

目取真俊『魚群記』論：台湾人女工をめぐる政治・経済・欲望

佐久本，佳奈 / サクモト，カナ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

41

(開始ページ / Start Page)

297

(終了ページ / End Page)

326

(発行年 / Year)

2015-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010693>

目取真俊『魚群記』論

—台湾人女工をめぐる政治・経済・欲望—

佐久本 佳 奈

1. 台湾人女工をめぐる社会的文脈

目取真俊『魚群記』（一九八三年）は、本土復帰を間近に控えた「基地らしい基地もない北部の小さな農村」を舞台とした短編小説である。^① 少年「僕」は、仲間たちと共に近所の川に生息するテラピアの瞳孔を弓矢で射抜く遊びに没頭する。「僕」の父はパインを栽培しており、兄は村のパイン缶詰工場で働いているが、二人は復帰をめぐる対立していた。「僕」は工場に出稼ぎに来ていた台湾人女工と接触することを父親から厳しく禁じられるが、一人の女工Kに惹かれ、「初めて女の体に触れてみたい欲望を覚え」る。ある晩、女工の部屋に男性工員たちが通っているという噂を元に、「僕」は仲間たちと宿舎に忍び込むが、そこでKが兄と交わる姿を目撃する。「僕」のKへの想いは成就し

ないまま、季節労働を終えた台湾人女工たちが帰郷した後になって分かったのは、Kが父とも関係を持っていたということであった。以上が作品の梗概である。

『魚群記』に関する先行研究では、「僕」がセラピアの眼を射抜く行為を、「異性愛への目覚め」として解釈する読みがなされてきた。その一つとして、朱恵足の論を引用する。

兄に殴り付けられた後、少年は、セラピアの瞳孔を貫き通すことによって、彼女に対するやり場を失った欲望を、憎悪と怒りと共に放出する。仲間たちと「ひとつのゼリー質の膜につつまれた五つの卵核のように」身を寄り添い、セラピアを狙撃しつづけてきた少年は、身体の内部から迸り出る精液（新しい匂い）によって、その疑似同性愛的な「透明な膜を突き破る」。それは、少年が「台湾女」に対する欲望に苦しめられる夜に告別し、内部に募ってくる欲望を放出することによって、自分自身の外部に踏み出すことを同時に意味しているのだ。⁽²⁾

ここにおいてセラピアの眼への「狙撃」は「僕」が仲間たちとの「疑似同性愛的な」関係の外部へと踏み出す行為として読まれているが、テキストに描かれる「僕」の欲望が、「異性愛」と「疑似同性愛」という二項対立的な構図ではとらえることのできない多形的な運動性をもっている面についてはまだ論じられていない。

また、西成彦がテキストを「沖縄人の加害者性を前景化する」⁽³⁾と評価したのは、ほかでもなく、台湾人女工を差別する沖縄の男性を指したものであると考えられるが、「沖縄人」を「加害者」かそうでないかに二分する議論では、パイン工場を乱立させ、台湾人女工の低賃金雇用を利用した沖縄パイン産業の発展が、「沖縄人」をもモノカルチャー経済に取り込むものであったという構造的な暴力を見落としてしまう。⁽⁴⁾

その暴力とは、一九五八年の通貨切り替えや、それと同時になされた外資導入条件の緩和（高等并務官布令第一号「琉球列島における外国人の投資」）、また、本土政府による沖縄産パイン缶の関税免除などの「恩恵」措置をはじめとする経済政策が、在沖米軍基地の継続的使用をすすめるために住民の不満を経済開発によって軽減させようとする日米間の共同戦略上に位置づけられることにある。さらに、琉球政府による「パインアップル産業振興法」（一九五九年）は、沖縄でパイン缶詰を生産すれば必ず売れるという売り手市場を形成した。⁽⁵⁾ 外資導入改正も「恩恵措置」も、零細農家の所得向上にはつながらず、日本本土資本の利潤追求と、それに追従して資本家的成長をとげようとはかる沖縄の政治勢力に寄与したといえる。

また、「沖縄人」の「加害性」は、女工の性の収奪という面から説かれてきたのだが、それに加えて、女工が季節労働者であったという経済面における「被害性」についても論じられる必要がある。「僕」が復帰直前の沖縄本島北部の村で台湾人パイン女工の姿を見ていたように、当時の沖縄には多

くの台湾人が季節的に労働していた。沖縄における台湾人労働者の雇用は、一九六五年九月に施行された「非琉球人の雇用に関する規則」（布令第一一〇号「琉球列島における外国人の投資」に基づいて制定）によって、以前は高等弁務官に所属していた「非琉球人」の雇用許可の権限が琉球政府労働局に移管され、「非琉球人」労働者を受け入れる体制が整ったことに始まる。^⑥その際、沖縄の経済に必要とされる技術をもつ労働力のみを受け入れ、かつ、沖縄の雇用者の労働条件を引き下げないような方針がとられたが、実際に導入された労働者には、季節的に多くの人手を必要とするさとうきび収穫作業、製糖工場やパイン缶詰工場などで働く単純労働者が相当数含まれていた。^⑦

例えば、テキスト内の時期に当たると推測される一九七一年の職業別「非琉球人」雇用許可状況を当時の『職業紹介関係年報』で見ると、全体数六二六七人中、パイン季節工を中心とした技能工生産工程の職業に携わる三一九三人が最も多く、それにキビ刈り作業を中心とした農林業および類似の職業の一五九三人を合わせると、「非琉球人」の就労した職業はこれらの単純労働の二部門で七六・八%を占めていたことが分かる。また、国籍別「非琉球人」雇用許可状況では、台湾からの労働者が圧倒的に多く、全体数六二六七人中三七一人（五九・三%）を占めていたことが分かる。そのうち技能工生産工程における台湾人労働者は一九〇〇人、農林業及び類似の職業では一五八六人と、それぞれの部門の六割以上が台湾人労働者で占められていたし、台湾人労働者のほとんどがこの単純労働の両部門に就業していたことが分かる。そしてさとうきび季節工の七割以上と、パイン季節工のほと

んどが女性労働者であつた。⁽⁸⁾

しかし一九七一年に実際に入域したパイン季節工の人数は、許可人数の一二五〇人に対して一六五人しか記載されていない。この減少は大東島に入域していたキビ刈労働者をパイン季節工に転用したことに起因するというが、それはつまり、表の数字には上がってこない数の労働者が存在したということである。⁽⁹⁾ パイン季節工は、パインの収穫時期のずれを利用して、八重山の工場で操業を終えた後に沖縄本島へ渡ることもあつた。また、労働最盛期が冬から春のさとうきびと、夏から秋のパイナップルのずれを利用して、製糖関係の台湾人労働者がパイン工場へ転用されることと、その逆もあつた。⁽¹⁰⁾ これは一定期間に必要とされる低賃金の台湾人労働者を使い捨てただけにとどまらず、沖縄内部の複数の場所で使い回したことに他ならない。また、パイン季節工の賃金は、一九六七年度の琉球輸出パインアップル組合（理事長宮城仁四郎）と台湾人労働者の間で交わされた雇用契約書によると、男性は沖縄工員が時給二一セント、台湾工員は時給二三セント、女性は沖縄工員が時給一五セント、台湾工員は一七セントであつた。⁽¹¹⁾ 就業時間は八時間、それを越える労働時間は時給に二五%増しの超過手当が付き、深夜業務は時給の五〇%増しの手当てが支給された。これらを加算すると平均時給は二五セントとなり、日給は約二ドルとなつた。⁽¹²⁾ しかしこれは、低賃金を長時間労働で補つた結果にすぎない。当時、台湾のパイン工場の日給は約五〇セントであつたことから、沖縄の収入は台湾での約四倍にもなつた。さらに宿舍が各工場で手配され、交通費も支給される好待遇となると、沖縄行き

希望者は多数であった。¹³ こうしたことをふまえた上で西の論文に戻ると、そこには台湾人女工の受けていた経済的な「暴力」が抜け落ちていると考える。関連していえば、山原公秋が「沖縄人」の「加害者性」を問う際、「加害者」である「沖縄人」に「僕」の存在を加えている山原の議論は、「僕」とセラピア、もしくは「僕」と女工の間に存在するかもしれない繋がりを断ち切るおそれがある。

「僕」は「幻の彼女」と体を重ね合わせることを夢想しながら、「指先に魚の眼球の感触が蘇り、彼女の深い瞳が魚の瞳孔に重なり合う」のである。台湾女工⇨セラピアのメタファーは、レイピストとして振舞う沖縄男性の醜さをあぶりだす表現としても機能している。¹⁴

ここでは「台湾女工」をセラピアに重ねてその眼球を貫く、「僕」の暴力性が「レイピスト」として浮き彫りにされる。たしかに、セラピアの瞳孔を弓矢で射る「僕」の行為は暴力的であるが、それはあからさまな痛みを想像させる行為であるだけにある種見えやすい暴力であり、その一方で、男たちの形づくる商品経済において女工は工場で、「僕」の母は家庭で、それぞれ賃金化されない労働を収奪されるといった家父長制と資本制の結託による支配構造を持つ暴力との差異は明確だろう。ゆえに、「僕」が魚の目を貫く行為には、他者の痛みを顕在化させるようなパフォーマティブな暴力が機能していると読めないだろうか。そこでは、「僕」が他者の傷口に触れることによって感じられる痛

みや、他者に与える暴力によって自身へと跳ね返ってくる暴力の行方が問われる必要がある。本論では、「僕」の欲望がさまざまな対象へと転移する蠢きにおいて、台湾人女工を性的商品として利用する沖縄の男性工員や、父とその座を争うようにしてKを奪いあう兄のような男性主体とは異なる性的快楽を「僕」が生きているということが、戦後沖縄の消費資本主義的なパイン缶詰産業に収奪される台湾人女工を想像的な関係の中に捉えなおす契機となることを論じたい。

2. 貫かれる「僕」の身体

「僕」は、ある夜、仲間たちと共に忍び込んだ宿舍で、ひそかに思いを寄せていた台湾人女工Kが自分の兄と性的な関係を持つていることを知ってしまう。⁽¹⁵⁾ 宿舍からの帰り道、「僕」は「もつれ合う兄と彼女の姿」を思い出し、「憎悪」を抱く。これは、「僕」がどんなに父に殴られようが抱くことのなかった、いわばテキストに初めて表れる感情であり、Kの存在を介することによって生まれた特別な感情である。

帰り道、僕らはやり場のない怒りに、殆んど声もなかった。(中略)川面に映った彼女の窓の二つの影ともつれ合う兄と彼女の姿が僕の目に焼きついて放れなかった。それは、テラピアの眼

を射ぬいた針のように僕の肉奥にまで達し、憎悪と怒りの毒を染み渡らせていた。⁽¹⁶⁾

そしてこの日の出来事を境にして生まれた憎悪の感情は、それまで「僕」が反復していたテラピアの目を射抜く遊びを、新たな意味を含む行為へと変化させる。

「おい、危いぞ」。テラピアの群れはNの声にたじろぐ事も無く、大きく口を開けて流れ込む汚物を待ち受けていた。僕は空虚で威圧的な数知れぬ口腔と瞳孔の黒い群れと向かい合っていた。僕の中に新しく生まれつつある感情が憎悪と怒りと共に目覚めようとしていた。(中略) 彼女の部屋の明かりが黒い群れの中に浮かんた。そして彼女の影が。僕は目を閉じた。音を立てて流れ落ちる排水管の震動が、僕の中を流れる熱い濁った血の波動と呼応した。排水管の温もりは僕の下腹部の血を滾らせた。

僕は目を開けて、目の前の巨大な一匹のテラピアの瞳孔に照準を合わせた。それはまさしく兄の目であり僕自身の目だった。⁽¹⁷⁾

夜の宿舎の秘密を知った「僕」があらためて「テラピアの瞳孔に照準を合わせる」行為には、「僕」がこれまでくり返してきたテラピア釣りにおいて「自分だけの魚体の楽しみ方を味わう」のとは異

なった対象が想定されている。ここには明らかに、兄に対する憎しみを、セラピアの瞳孔を兄の目に見立てて貫く行為で解消しようとする「僕」の心情が表れている。しかし「僕」から兄へ向けられた憎悪は、Kを奪われた悔しさを意味するものでしかありえないのだろうか。というのも、この場における「憎悪」という感情こそ、「僕」の欲望がKではなく兄へと向かっていることを暴いてしまうからである。フロイトは、「憎悪」つまり「憎しみ」の感情を次のように説明する。

臨床での観察が教えている事実であるが、憎しみは、意外なほど規則的に愛に同行している
アンビヴァレンツ
 (両価性) だけでなく、さまざまな人間関係において往々にして愛の先駆けともなっているし、
 そればかりか、さまざまな事情に応じて、憎しみは愛に、愛は憎しみに変身したりもする。⁽¹⁸⁾

兄への憎悪が同時に兄への愛を示しうるとすれば、「僕」が兄へ向けるまなざしの中に存在する、単なるあこがれとは形容しがたい性的な響きが含まれる瞬間をモはや見逃すわけにはいかない。以下は兄が父に台湾人女工たちの帰郷を伝えた後の場面である。

父は急に僕を突き放すと仁王立ちになって兄を睨みつけた。兄はそれにまったく頓着せずに罐を口へ持って来ると汁を飲み始めた。

ねっとりとした汁が縁から溢れて兄の太い首筋をゆっくりと流れ落ちた。父は兄の態度の前に成す術もなく、荒々しく兄の前を通って表へ出て行った。

母が僕の背中をさすりながら慰めるように何か言っていたが、僕はそれには耳を貸さずに、外の残光に浮かぶ兄の影を見上げた。兄は作業服の袖で口を拭くと僕の目の前に罐を差し出した。「吾達と台湾女達とで作った物やさ、飲め」。僕は身じろぎもせず兄の目を見据えた。「ふん」。兄は罐を引っ込めると外へ出、疲れた体を引きずるように井戸端に行くと汚れた体を洗い始めた。¹⁹

兄を観察する「僕」の視線は、「ねっとりとした汁」が男性性を象徴する兄の「太い首筋」を流れていくさまを捉えており、ここにおいて「僕」から兄へのホモエロティックな欲望が浮き彫りになる。しかし「僕」から兄への欲望は、兄への視線に表れるだけでなく、先に引用した部分において決定的に露呈していた。

川面に映った彼女の窓の二つの影ともつれ合う兄と彼女の姿が僕の目に焼きついて放れなかった。それは、テラピアの眼を射ぬいた針のように僕の内奥にまで達し、憎悪と怒りの毒を染み渡らせていた⁽²⁰⁾（傍点引用者）。

「僕」から兄への憎しみが愛と同時に起こりうることはすでに述べた。しかし、最も重要なのは、この憎悪が「僕」にどのようにして芽生えたのか、その描写である。「憎悪」は「僕」の内側からひとりでに湧いたものではなく、「テラピアの眼を射ぬいた針」のような鋭いものに貫かれ、さらに「内奥にまで達し」たそれによって感じられていた。「僕」が女工を貫く想像を重ねた「テラピアの眼を射ぬいた針」は、いまや「僕」を貫いていた。その時、「僕」は「憎悪」を抱くのだが、それは「彼女の窓の二つの影」に、「もつれ合う兄と彼女の姿」を見たことを起因とし、端的にいえばそこでの身体は兄によって貫かれていた。つまり「僕」が「内奥」に感じ、「憎悪」を「染み渡らせて」いる「針」とは兄の身体のアナロジーであり、そしてこの時「僕」が感じていた「憎悪」とは、兄に貫かれないと欲することであつたのではないだろうか。

ここには「異性愛への目覚め」（朱恵足前掲論文）として収束させることが出来ない欲望として「僕」から兄に対する欲望が存在するが、後述するように、その欲望もまた転移していくさまの一つに過ぎない。そして「僕」の欲望が転移する様子は、「僕」が対象を欲する形ではなく、対象へと自分を融合させていく形に表れていることに注意する必要があるだろう。それは、「僕」が兄に「憎悪」Ⅱ「愛」を抱きながら、兄に貫かれる身体を想像する時、兄に貫かれるKの身体への「僕」の同一化が起きていたのではないかということである。つまり、「僕」がKへ向ける欲望とは、むしろ、兄に欲望されるKのようになりたいたと欲してKへと同一化していくような、兄の欲望を迂回したものでは

なかったか。そしてこの点において考えたいのは、「僕」は、想像力を介した身心の変容としてKに「なる」ということを通じて、兄のようにKを性的に消費する対象として欲望しない、ということである。

3. 女工、セラピア、卵核に「なる」こと

「僕」の欲望はさまざまなものへと転移し、同一化を伴い、なんら固定的なものへと収束されない蠢きそのものとして読むことができる。その一つの例として挙げられるのが、テキストに数度現れる、セラピアの眼の傷口に指を埋め込むあの行為である。

僕の指先はなめらかな魚の眼球の上を滑り無限の円運動をくり返す。僕のあらゆる感覚は素晴らしい速さで指先に集中し、魚の生命は瞳孔を起点に急速に失われてゆく。この二つの接点に生まれる単調な歓喜の音律だけを残して、僕の存在はゆるやかに溶解し霧のように薄らいでゆくばかりだ。そして、指先の円運動がしだいに速度を増し、やがて一つの点に収斂されて傷口の中へ消える時、白い陽の照りつける川辺に立ちつくしている僕は既にもうそこには居ないのだ。ただ焼けつくような指先の感覚だけがそこに取り残され、僕が再びそこに戻った時に何か啓示的な残

光を放っている²¹。

セラピアの「なめらかな眼球」の上で「無限の円運動」をくり返し、やがてその傷口へと指先を埋め込んでいく一連の行為は、「僕」によって「愛撫²²」であると捉えられていることから、それが単なる残虐行為ではなくはつきりと性的な快楽を生み出していることが分かる。そして重要なのは、セラピアへの「愛撫」の果てに、「僕」が「既にもうそこには居ない」と感じているように、「僕」自身が溶解し、境界を見失っていることである。この場におけるセラピアとの触れあいは、「僕」と女工の疑似的な性交の代理物などではなく、「僕」がセラピアそのものと指先で交わり、さらにはセラピアの身体と自分の身体との区別を失うような「僕」の想像的な変容であるのではないか。それはまさしく、「僕」からセラピアに対する同一化の運動が起きていることを示しており、つまり、セラピアと交わる過程において「僕」が「僕」でなくなり、セラピアに「なる」ことが始まっているといえる。

また、セラピア釣りに夢中になる仲間たちと「僕」がまるで一つの生命体を形成し、その内部で互いの境界線を失っているかのような表象には、「僕」の欲望が彼らへも向けられていることを読むことができる。

僕は数名の仲間と共にM川の川口で魚を狙っていた。川岸に生茂ったススキが、重なり合っ

腹這いになった僕らの姿を外界から完全に隠していた。僕らはひとつのゼリー質の膜につつまれた五つの卵核のように、思い思いの夢想を弄びながら、西陽を受けてきらめくおだやかな水面に魚の影が浮かぶのを待っていた。⁽²³⁾

「僕ら」をつつむ「卵核のよう」な「ゼリー質の膜」とは、卵巢のイメージとして受け取ることができる。でき、そこから新しく生まれ出ることを待ち望む少年たちという構図を想像するのは難しくない。それはのちに表れる「もうこれからはこの膜の中も息苦しいだけだ。僕らはこの透明な膜を突き破ると、めいめい新しい思いをめぐらしながらススキの茂みから出るのだった。」という部分へと繋げて読むことができる。そしてこの場面は、少年たちが「透明な膜を突き破」って「疑似同性愛的な」世界から抜け出すことの比喩であると朱によって意味づけられたのであるが、しかし、「膜を突き破る」以前の、「僕ら」が「卵核」という細胞形態に喩えられた段階において、「僕ら」の間に同一化が起きていた可能性を忘れてはならない。そこには個々をへだてる皮膚や身体器官をすでに失い、「ゼリー質の膜」によって一つの生命体を保持しているかのような、少年たちの間に起きているゆるやかな溶解が見られる。彼らの互いへの同一化は、少年たちがテラピアを通して欲望を共有し、時には同じ快感を味わっていた描写において際立つ。

僕はいつものようにテラピアの盛り上がりつつあったなめらかな眼球を指先で愛撫した。生臭いぬめりが指先の滑りを助け、僕は指先に伝わる透明な弾力の微妙な刺激を心ゆくまで味わった。待ちかねたNの催促が僕を我に返らせ、テラピアはNの手へと渡された。そうして僕は代わる代わる自分だけの魚体の楽しみ方を味わうのだった。最後に僕の真似をして眼球を弄んで恍惚に浸っているSと、僕は深い満足の微笑を交わし合った。⁽²⁴⁾

この場面で少年たちが代わる代わるに弄ぶ、「細かい痙攣を時おり走らせるだけ」の、すでに生を失いつつあるテラピアは、もはやただの「魚」ではなく、「魚体」となる。そこで「体」という文字が人間の身体を想起させることは確かであるが、しかし、テラピアが「魚体」と認識される時に起きているのは、人間の身体イメージが魚に投影されることではなく、むしろ人間と動物の境界が取り払われた次元で、魚との触れあいを通じて快楽を得ることの可能性である。デリダが「触れること」触覚とは、触れているものによって触れられるにまかせることに帰着する⁽²⁵⁾と述べるように、魚体や眼球に「触れて」いる「僕ら」の指先は、同時に、魚体や眼球から「触れられて」もいる。それは、主体／客体の対立さえも不可能にしてしまうような運動である。「ゼリー質の膜につつまれた」という「僕ら」をおおう感覚も、「僕ら」がテラピアの眼球に触れることで返ってくる感覚であり、心地良ささえ伴う漂いの中で「五つの卵核」となった「僕ら」は、互いに同一化を起こしていた。ここに

において、セラピアとの触れあいを介した少年たちの間には、異性愛主義的な言説からは取りこぼされていってしまう豊かな快樂が存在したはずである。

「卵核」に「なる」と同時にセラピアにも同一化すること、少年たちの間にある境界は溶解した。これも「僕」のさまざまな対象への変身として捉えることができる。では、欲望する対象に同一化し、その対象に「なる」ということが、このテキストにおいてどのような意味を持ちうるのか。ドゥルーズ・ガタリは、カフカの『変身』におけるグレーゴルの虫への変化を、ひとつの「運動」であると述べる。

動物に変化するということは、まさに運動をするということであり、まったくその積極性のない強度の連続体に肉薄することであり、境界を越えることであり、もはやそれ自体に対してしか有効でない強度の連続体に肉薄することであり、純粹な強度の世界を見出すことである。そのような世界においては、すべてのフォルムがこわれ、また意味スルモノ・意味サレルモノというすべての意味作用もこわれて、そのかわりに、まだ形成されていないマチエール、非領域化した流れ、意味作用をしない記号が現れる。⁽²⁶⁾

女工、セラピア、卵核への同一化を通して欲望を多形的に転移させていく「僕」の運動もまた、

「逃走」であるに違いないだろう。女工Kを兄に奪われたことによって威厳を失った父も、父の座についたつもりでいる兄も、「僕」を上から押さえつけようとする場に位置することはテキストの描写から明らかである。そして、父と兄の二人は決まって同じ命令を「僕」に下すのである。すなわち、「あの女達はただ銭儲けに来てるだけやあらん、童ぬ近寄たら許さんど」「二度とここ（台湾人女工の宿舎）に来るなよ」という命令である。父と兄は「僕」が女工へ近づくことを禁じるが、それは同時に、遡及的に女工への欲望を煽る「法」となって「僕」に振りかざされている。しかし、「女工を欲望するな」「女工を欲望しろ」と下された「法」を、結果的に「僕」は破ることとなる。それは端的に、女工と性的な関係を結べなかったことを指すが、むしろその失敗が、「僕」は父や兄が欲望したようには女工を欲望しないことを意味する——「カフカが言うように、問題は自由の問題ではなく、出口の問題である。父の問題は、父に対してどのように自由になるかということ（オイディプス的问题）ではなく、父が見出さなかった場所でのようにひとつの道を見出すかということである」²⁷⁾。「僕」は父と兄のように、女工に「父の威厳」を体现する身体としての価値を見出さないし、そのようにして女工を欲望しない。

例えば、兄が「僕」に「吾達と台湾女達とで作った物やさ、飲め」²⁸⁾とパイナップルの底に溜まった汁を飲むように命じる場面において、「僕」はそれを拒否した。「吾達と台湾女達と」の秘密の交流からあぶれた「僕」に対して、残り物の汁を自分の手から分け与えてやろうとする兄は、絶対的な権力者で

あるかのように見える。しかし反対に、その振る舞いには、「僕」が正規の流通——市場に出荷され、値段を付けられ、売られる流通経路——には乗らない形でパイナップルを受け取った事実をなんとかして回収したいとする兄の意図があるようにも考えられる。パイナップルは、兄のような「沖縄人」男性工員の監視のもとに流通されなければならなかった。兄を見上げる「僕」の姿勢は、いまだ力の弱い者のように見えるが、しかし「身じろぎをせず目を見据え」たまま、兄から手渡されようとするパイナップルを受け取ろうとはしない。「女工を欲望せよ」と振りかざされた父の「法」から逃れる「僕」の逃走運動は、大量生産のなかで廃棄処分に回される傷物のパイナップルを、女工から無償で貰い、そして食べる、という行為に重ねられる。どちらも既存の流通から脱出する運動である。そして、その資本蓄積的サイクルから抜け出た場において、「僕」とKの関係は創造しなおされていく。

4. 他者を消費しない「僕」

「僕」は女工やテラピアに想像的に「なる」ことを通して快楽を得られたのだが、一方で、「僕」がKとの接触を通じてKの痛みを感じる可能性も描かれている。以下は、昼間のパイナップル工場に忍び込んだ「僕」と仲間が、Kから傷物のパイナップルを分けてもらった直後の状況である。

Nの投げたパイン罐が銀色の弧を描いてゆつくりと落下し、鏡のような水面を砕いた。鈍い水音が響いた。「台湾女から物もらわれるか、馬鹿にするなよ」。Nは憎々し気に吐き捨てるように言った。SとYも次々と罐詰を投げ捨てた。鈍い水音が連続して響いた。それは僕にもまったく思いもよらぬ彼らの行為だった。

Nらは催促するように僕を見つめて言った。「おい、マサシ、早くそんな物川んかい投げ捨てれ」。僕は途方に暮れて彼女を見上げた。彼女は僕らの頭越しに川面に広がる波紋を見つめていた。その顔は心の動きが完全に止まってしまったかのように全く無表情だった。彼女の目が僕の目を見つめた。それは射抜かれた魚の瞳孔のように痛ましかった。僕は指先に彼女の目の傷口の感触を感じた。次の瞬間、彼女の白い手が機械的に伸び、網戸は閉ざされた。⁽²⁶⁾

山原は、この場面について、「沖縄の少年たちに迫害される彼女の〈心理〉的な「痛み」が、「僕」には、テラピアを射ぬく時の指先の「感触」として伝わる。(中略) 目取真俊は、あえてそれを、〈心理〉〈内面〉を表象することによってではなく、「触覚」をなかだちとした「痛み」として描いている。痛みを与える／与えられるという自他の関係を、身体的感覚として表象することによって、顕在化させているとも言える。⁽³⁰⁾と論じているが、そこではあくまでも「僕」とKが「痛みを与える／与えられる」という自他の関係」に固定されたままである。しかし、Kの「心理的な痛み」は「彼女の目の

傷口の感觸」となつて「僕」の指先に触れられており、同時に、触れている。この場面において、「自他の關係」ではなく、「僕」はKになることでその痛みを感じていたとはいえないか。そしてこの時感じた痛みとは、それをつくり出した原因を個人に限定できるようなものではなかつたはずである。Nらがバイン缶を捨てたのは、Kが「台湾女」という呼び名で蔑まれていることを知っていたからであつた。村の男たちによる人種差別と性差別は、Kの雇用条件と深く結びついている。彼女たちは、当時の沖縄の「過剰の中の不足」³¹状態の労働力を補うために、低賃金で使い捨てられ、各地で使い回された存在であつた。Kの傷は社会的な暴力を受けた痕でもある。

はたして、Kの痛みに共振する「僕」が、魚の目を貫く行為において「レイビスト」的な暴力を發動させているといえるだろうか。むしろ「僕」は、Kが被っている暴力を、自分はKへと与えないためにセラピアの目を貫いているのではないか。もちろんそれは単に、セラピアをKの身代わりとすることではない。そうではなくて、セラピアの目を貫くとき、同時に「僕」がセラピアに「なる」ことによつて、その暴力を自分自身へと折り返すような経路が生みだされているのではないか——「僕は目を開けて、目の前の巨大な一匹のセラピアの瞳孔に照準を合わせた。それはまさしく兄の目であり僕自身の目だつた（傍点引用者）」。³²この時「僕」がセラピアへ向けた弓矢に表現される暴力は、「僕」へと折り返されているが、ここで重要なのは、弓矢に侵入される「僕」自身の身体が、その痛みにおいて快楽を感じ得るということである。例えば、魚の眼球への愛撫に陶醉する場面の、「指先の円運

動がしだいに速度を増し、やがて一つの点に収斂されて傷口の中へ消える時、白い陽の照りつける川辺に立ちつくしている僕は既にもうそこには居ないのだ」という描写における「僕」の快楽は、テラピアに同一化した自己の「傷口の中」への、自己の「指先」の侵入によって得られる快楽ではなかったか。つまりその時、「僕」の身体には、痛みをマゾヒズム的な快楽へと読み換えるということが起きていたのではないか。

ここにおいて「僕」のマゾヒズム性は、消費主義的な欲望を絶えず喚起させる性の流通システムから抜け出る運動を展開させている。「僕」は欲動を消費でもって充足させることを放棄し、それとは異なった仕方、つまり「痛み」を「快楽」へ向けて読み換える方法において、価値を見出していくのである。その運動はドウルーズⅡガタリの言葉の通り、「父が見出さなかった場所でのどのようにひとつの道を見出すかということ」であるが、むしろ、「僕」の「逃走」は「ひとつの道」を再定義することなく、固定され得ない動きをもって既存の流通システムから抜け出ていく。例えば結末において、「僕」が虚無的な笑いさえ浮かべる場面は、単なる絶望感の表れとは異なる読みへと開かれていく。

僕は芝生の上に転がった空のパン罐を見つめた。僕ら四人がその中にすっぽりと収まってしまいそうで、僕は声を押し殺して笑った。その中にはKもいるだろう、そしてNやSも。川が海

に注ぎ込むように、あらゆるものがその空虚な空洞の中に流れ込み、消え去っていく気がした。³²⁾

この描写を、父や兄のように女工に性的商品としての価値を見出す流通から抜け出た「僕」が、再びそこに「すっぱりと収まって」しまったと見なすのではなく、「パイン罐」といういわば閉ざされた構造の中で絶えず快楽を充足させようと女工を消費し、権力闘争に一喜一憂しては同じ場をめぐり続けるといった循環の中に収まった「僕ら」を、「僕」が外部からまなざす視点を持ち得ているということに注目すべきであり、その点において「僕」の意識は自分を閉じ込めている構造から逃れ出ているといえるだろう。「僕ら」を取り囲むパイン缶のイメージはまた、日米の政治的な経済開発によってモノカルチャー経済に閉じ込められた沖縄が、その内部で換金作物の売り上げをめぐってパイン工場を乱立させるも労働者の生活は良くなり、働けば働くほど貧しくなる植民地的構造に組み入れられていく状況にも重なる。

他者の道具化による欲動の充足は、対象の所有と破壊へ突き進む結末を避けられない。女工が季節的に労働したのは、その一定期間の低賃金雇用が最も効率よくパイン工場の利益を上げることができたからであった。女工は、労働中は工場資本によって所有されるが、繁忙な労働期間が終わり利益にならなくなれば「廃棄処分」される。不断の自己増殖を目的とする過程で「他者」を搾取し続ける以上、資本制の行き着く先も対象の破壊である。しかし、作業場の監督の目を盗み、工場の窓をへだて

てKの手から廃棄処分に回されるパイン缶詰を受け取って食べた瞬間、「僕」は消費型資本制のシステムから抜け出ていた。そしてテラピアもまた、「排水口から流れ出すパインの屑や食堂の残飯を求め」、廃棄されるものを摂取して生き延びていく点で「僕」と同じく消費型資本主義のルートから逸れて生きる存在として捉え直される。女工から「僕」への価格の発生しない贈与は、「等価」交換として設定された価格の内部に、女工のピンハネや、さらには「僕」の家族を陰で養う母の不払い家事労働などの搾取が存在することを暴く契機をもたらす。

「僕」はKの身体を性的に消費しないし、Kが作ったパイン缶詰を正規の流通経路に乗せられたかたちで消費しない。それは、テキスト内における消費資本主義的な「価値」の転倒を引き起こす運動である。女工と性的な関係を結べないことで父や兄などの村の男たちから疎外された位置に存在するような「僕」は、しかしその位置において、男たちによって正規とされてきた欲望の流通サイクルに伴う暴力性を撃つ可能性を秘める。他者への暴力を自己に折り返し、その痛みを快楽として読み換える「僕」のマゾヒズム性によって暴力は効力を失い、宙づりになる。他者を欲動の充足として使用しない「僕」の逃走運動は、他者を所有することも破壊することもなく、他者との関係を生きつづける方法となる。

【註】

- (1) 初出は『琉球新報』一九八三年二月九日朝刊（第十一回琉球新報短編小説賞受賞作）。のちに『沖縄文学全集9』（国書刊行会、一九九〇年）、『沖縄短編小説集「琉球新報短編小説賞」受賞作品』（琉球新報社、一九九三年）、『魚群記 目取真俊短編小説選集1』（影書房、二〇一三年）に収録。本稿は、『沖縄文学全集9』に収められたものをテキストとして使用した。
- (2) 朱恵足「目取真俊『魚群記』における皮膚——色素／触覚／インターフェース」『現代思想』青土社、二〇一一年一〇月号、23頁。
- (3) 西成彦「暴れるセラピアの筋肉に触れる」西成彦・原毅彦編『複数の沖縄——ディアスポラから希望へ』人文書院、二〇〇三年、13頁。
- (4) 詳しくは拙稿「目取真俊『魚群記』における貨幣的存在」『琉球アジア社会文化研究17号』（琉球アジア社会文化研究会、二〇一四年）を参照されたい。
- (5) その後沖縄のバイン加工会社の八割までが外資導入によって設立されることとなった。牧瀬恒二は、布令第11号が明らかに日本本土の資本に対して沖縄への投資を呼びかけたものであると指摘している（牧瀬恒二『沖縄と米日独占資本』汐文社、一九六八年、68—69頁）。
- (6) 「技術導入審設置へ 労働局内に 申請処理の敏速化で」（『琉球新報』一九六五年九月二五日）。また、「非琉球人」とは、米軍統治下の「琉球列島」に戸籍を持つ者と米軍要員以外のすべての者を指す。詳しくは、

土井智義「米軍統治下の沖縄における出入管理制度と「非琉球人」」富山一郎・森宣雄編『現代沖縄の歴史経験』（青弓社、二〇一〇年）、「米軍占領期における「国民」／「外国人」という主体編成と植民地統治——大東諸島の系譜から」『沖縄文化研究』（法政大学沖縄文化研究所、二〇一二年）を参照。

(7)

沖縄県商工労働部編『沖縄県労働史第三卷（一九六六—一九七三年）』（二〇〇一年、847頁—848頁。また、一九五〇年代から一九七〇年代にかけての台湾の急速な工業化と女工の実態について調査した黄富三が、「台湾の収入になるのは唯一の加工費のみであり、そうした加工費は安い労働力によって生み出されており、安い労働力を構成しているのは他ならぬ女工である、それゆえ、女工こそが輸出業の最大の功労であると言っても過言ではない」と述べているように、台湾においても女工が安価で豊富な労働力として重宝されていたことが分かる（黄富三『女工と台湾工業化』交流協会、二〇〇六年、64頁）。沖縄への台湾人女工の導入は一九七二年の日中国交回復を機に停止され、代わりに韓国からの女子労働者が一九七三年から一九七六年まで導入された（沖縄県商工労働部編前掲書、860—863頁）。

当時、沖縄側がバイン季節工を募集する際、各バイナツプル工場の要請を取りまとめたものを琉球輸出パイナツプル缶詰組合が一括して導入の許可申請を行なった。この許可を得たうえで、台湾現地で斡旋人による募集が行なわれた（沖縄県商工労働部編、前掲書、858頁）。しかし、台湾人労働者の募集には、中華民國の政府機関も関わっていた。沖縄との関係を強化するために、中華民國政府は一九五八年に「中琉文化経済協会」を沖縄との窓口として設立し、相互の交流を促してきた。その中で、同協会の主導で最も成

功した経済の交流とは、戦後の沖縄の復興のために大量の労働者（農林関係及び建築関係など）を派遣することであった。中琉文化経済協会は一九六八年から一九七二年にかけておよそ一回にわたってサトウキビ労働者二四四六人（重複雇用も含む）、パイン女工六四三人などを送り出した。台湾の中琉文化経済協会に対する機関として沖縄に設置された「中琉協会」の顧問には琉球政府副主席の神村孝太郎・琉球政府経済局長の瀬長浩、国場組社長の国場幸太郎、会長に琉球銀行総裁の富原守保といった沖縄の政財界の重鎮が役員に名を連ね、会員にも著名な財界人が加わるなかで、大東糖業株式会社の宮城仁四郎社長（一九六四年～一九八九年「中琉協会」会長）や琉球製糖の宮城雍典社長などもいた。そのため、一九六〇年代における台湾人労働者・技術者の沖縄への派遣も、主に同協会のメンバーが経営する会社や関係会社配属されていたことが分かっている。以上、戦後の中華民国の対沖縄政策として台湾人労働者に焦点をあてた研究は、八尾祥平「戦後における台湾から『琉球』への技術者・労働者派遣事業について」（『日本台湾学会報』第12号、二〇一〇年）、吳俐君「戦後沖縄における台湾系華僑——一世の移住過程を中心に」（琉球大学大学院人文社会科学研究所比較地域文化専攻博士論文、二〇一一年）、および「戦後沖縄における台湾人労働者」（『移民研究』琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門、二〇一一年）を参照。また「中琉協会」については、赤嶺守「戦後中華民国における対琉球政策——一九四五年～一九七二年の琉球帰属問題を中心に——」（『日本東洋文化論集』二〇一三年）を参照。

（8）琉球政府労働局『職業紹介関連年報一九七一年度』一九七二年、30頁。

- (9) 琉球政府労働局前掲書、31頁。一九七一年の沖縄本島北部各地のバイン工場には、計九三人の台湾人労働者が働いていた。なお、沖縄本島と八重山地区を合わせてバイン季節工の入域数が最も多かった年は、一九六八年の七十七人（全て女性）であり、その年はさとうきび季節工との合計数が一九九五人と最多であった。同年、北部には計四一七人の台湾人労働者が導入され、必要人員に占める依存度は二〇・一％であった（沖縄県中小企業総合指導所『バインアップル缶詰産地診断／昭和四八年二月』34頁）。
- (10) 平岡昭利「サトウキビ農業における外国人労働者の導入と実態——『工業的農業』の一断面」サンゴ礁地域研究グループ編『熱い心の島——サンゴ礁の風土誌』一九九二年、130頁。
- (11) 国永美智子「戦後八重山のバイン産業と台湾人『女工』」（日本語版）淡江大学亜洲研究所修士論文、二〇一一年、32—33頁。
- (12) 同前。また、沖縄の産業別月間平均賃金比較表（一九七〇年—一九七三年、単位：円）によると、バイン製造業の工員は全産業の平均賃金の半額にも満たない。例えば、一九七一年度の全産業平均賃金額が五二、六〇〇円／月額であるのに対して、バイン工は二四、二九四円／月額である。さらに、一九七三年度には県の実施している失業対策事業の賃金三三、〇〇〇円／月額（日給月額換算）を切って、三〇、四六七円／月額である（沖縄県中小企業総合指導所前掲書、34—35頁）。
- (13) 沖縄県商工労働部、前掲書、858頁。
- (14) 山原公秋「目取真俊の台湾表象——『魚群記』『マーの見た空』をめぐる——」「『論究日本文学』立命館

大学日本文学会、二〇一一年、70頁。

(15) 台湾人女工が現地で男性と関係を持つことは、実際に派遣事業が行われる際にも懸念されていたことであつた。八尾祥平によると、中華民国国民政府は、派遣授業によつて自国に不利益となる自体が起こらないように、「パイン工は大半が女性であつたが、不測の事態に対応することができるよう男性も入れる」という措置をとつた。具体的な内容を挙げれば、「南北大東島への派遣の可否を検討する為に現地視察が行われ、島内の生活インフラが貧弱なこと、警備員付きの女子寮がないことをあげ、30歳以下の未婚女性を派遣するには向かない環境であり、女性の安全が確保される環境を整えるべきである」ということが国民政府によつて進言された（八尾祥平前掲論文、247頁）。また、吳俐君によると、当時沖繩での労働期間中における台湾人季節労働者の管理や生活指導などを行うため、中華民国政府がその出先機関である中央信託局派駐沖繩代表所に台湾の警備総司令部の安全局から駐沖安全調査員を派遣していたことが分かっている。その主な業務は在沖台湾人の査証申請や出入国管理であつたが、彼らに対する思想の調査および品行方正のための「安全調査」の中に、夜間外出を控えること、また、夜間外出する場合なるべく集団行動を取るか男子工員を同行させるように指示したことが挙げられる（吳俐君前掲論文、27頁）。国永美智子がおこなつたインタビューの中にも、当時、八重山でパイン缶詰工場の職員であつた男性の以下のような発言がある。「中には地元の男性でパイン工場に喜んで働きに来る人もいた。パイン工場には若い娘がいっぱいたからよ。とくに、倉庫の仕事をやりたがつたさ。あそこは、恋の場所になつたよ。」なかには、「台湾

女性と結婚する人もいた」という（国永美智子前掲論文、59頁）。実際に、知り合いの女工に会うために工場の炊事場に侵入した男性が住居侵入罪で逮捕されるという事件もあった。男性もまた、地元に住む季節労務者であった（『八重山毎日新聞』一九六七年七月二十九日）。

(16) 目取真俊「魚群記」『沖縄文学全集9』国書刊行会、一九九〇年、67頁。

(17) 同前、68頁。

(18) ジークムント・フロイト「自我とエス」『フロイト全集18』道籙泰三訳、岩波書店、二〇〇七年、40頁。

(19) 目取真俊、前掲書、71―72頁。

(20) 同前、67頁。

(21) 同前、58頁。

(22) 同前、61頁。

(23) 同前、59頁。

(24) 同前、61頁。

(25) ジャック・デリダ『触覚、ジャン・リュック・ナンシーに触れる』松葉祥一、榊原達哉、加國尚志訳、青土社、二〇〇六年、521頁。

(26) ジル・ドゥルーズ・フェリックス・ガタリ『カフカ——マイナー文学のために』宇波彰、岩田行一訳、法政大学出版局、一九七八年、20頁。

(27) 同前、15頁。

(28) 目取真俊、前掲書、72頁。

(29) 同前、70頁。

(30) 山原公秋、前掲論文、69頁。

(31) 琉球政府総務局広報課『琉球のあゆみ』一九六七年三月、5頁。台湾人労働者の多数が就業した職業とは、単に労働力不足をきたしていたのではなく、「多少過剰気味」の労働力状況の中で、誰も就きたがらない低賃金労働であったことを示す言葉である。琉球政府農林局農政部特産課が編集した『パインアップル関係資料一九七〇―一九七一年期』が、調査報告の最終頁にあたる136頁に、目次を付すことなくひっそりと台湾人労働者の入域総人員数を載せていることは、沖縄の戦後パイン産業史における彼／女達の存在の扱いを象徴するかのようで興味深い。

(32) 目取真俊、前掲書、73頁。